

John Clare の牧歌技法

——短詩類と『羊飼いの暦』——

John Clare's Pastoral Art : Short Poems and
The Shepherd's Calendar

森 松 健 介

要 旨

本稿は、17世紀までのヨーロッパ牧歌の二つの伝統——自然美を洗練された言語で示す伝統と、農民の労苦・困窮を詩行の裏に隠す伝統の二つが、John Clare (1793-1864) において、巧まらずして合体しているのを見る。田園や農民の実情を知らない都会人による慣習的牧歌を脱して、農作業の現場を知る貧窮詩人として上記合体を実現したクレア像を示す。初めにギリシア、中世、17世紀までの牧歌の伝統を略説したあと、17世紀フランスのラパン、フォントネルの牧歌論がイギリスに流入して、醜悪な農民の悲惨を描くのを避ける平穩無事な田園風景が牧歌の主流となったが、ロマン派がこれを一部改変し、クレアに至って田園の美的表現の高度な洗練と、巧まらずして田園描写に潜り込む政治性が合体した作風が現れたさまを、あまり有名ではない作品を数多く挙げて具体的に示し、最後に『羊飼いの暦』の1部を、この視点を導入して読もうとするものである。

キーワード

ジョン・クレア、牧歌・パストラル、美しい自然描写、農民の労働描写、詩の政治性

本稿は、17世紀までのヨーロッパ牧歌の2つの伝統——自然美を洗練された言語で示す伝統と、農民の労苦・困窮を詩行の裏に隠す伝統の2つが、クレア (1793-1864) において、巧まらずして合体しているのを見る。田

園や農民の実情を知らない都会人による慣習的牧歌を脱して、農作業の現場を知る貧窮詩人として上記合体を実現したクレア像を示す。

クレアが出るまでの牧歌 田園詩は紀元前6、7世紀のギリシアに始まったとされる。本格的にはテオクリトス（紀元前310頃-250）と、それを受け継いだモスコス（紀元前150頃）、ビオン（紀元前100頃）が牧歌の始祖である。だがローマのウェルギリウス（Publius Vergilius Maro, 紀元前70-19）の後年への影響は、ギリシア詩人のそれよりも大きかった。テオクリトスが純粹な田園描写だけを考えたのに対して、ウェルギリウスは詩句の背後に農民の窮状を埋め込んだからである。彼の牧歌（エクローグ）では「意味は部分的にしか明らかではなく、自己の時代の出来事を示唆する風刺の有用な手段となる」（Congleton：15）。《寓意的エクローグ》は信仰の寓意や、政治・経済・宗教界の権力者批判を含む牧歌の基となった。ペトラルカ（Petrarch, 1304-74）とボッカチオ（Boccaccio, 1313-75）が寓意という点で「意図的にウェルギリウスを自分たちのモデルとして選び、寓意的エクローグを認める態度が始まった」（同）。

イギリスでも当初は《寓意的エクローグ》の伝統が受け入れられた。17世紀半ばまでに、スペンサー、シェイクスピア、ミルトンなどが牧歌の寓意性をイギリスに持ちこんだ（森松'10 参照）。20世紀批評もこれに気づいた。早くも1908年にはローマ詩人群の牧歌に「隠された第2の意味」（Marks 3）やイギリス牧歌における「寓意の優勢」（同）が指摘され、20世紀後半にはクーパー（Helen Cooper）の『パストラル——中世からルネサンスへ』と、パタソン（Annabel Patterson）の『パストラルとイデオロギー』が、このような寓意を牧歌の本質として強力に論じた（森松'10「まえがき」参照）。スペンサーの『羊飼いの暦』にみえるこの傾向を、ポウプ（Alexander Pope, 1688-1744）は「スペンサーのエクローグ類は、あまりにも寓意的に過ぎる。パストラルの中で宗教問題を扱っている」（TE：31 118-

20行)と嘆いた。

ポウプまでのあいだに起こったのは、フランスの新たな牧歌論の影響だった。フランスではセビエー (Thomas Sebillet, 1512-89) の『フランス詩芸術』 (*L'Art poétique françois*) が、《端正》 (décorum) の考え方を説いた。17、18世紀英国では、文学にかぎらず絵画や文化全体においても、過激に走らない既成文化の継承の美意識であった《端正》という概念は大きな意味をなす。換言すれば、この概念は古典古代詩人の示した典雅を再現し、文化の構成員が共有すべき気品のある感性を指していた。自然詩の場合にも、この概念が、フランスを経てイギリスに導入された。17世紀フランスのラパン (René Rapin, 1621-67) とフォントネル (Bernard Le Bovier de Fontenelle, 1657-1757) の牧歌詩法こそが、時代の師表とされるに至る。《端正》の概念を受け継いだボアロー (Nicolas Boileau-Despreaux, 1636-1711) と歩調を合わせるように (Congleton : 35), ラパンは古典古代の牧歌の気品を、題材・言語・形式において継承すべきだと考えた (Congleton : 53-62)。このパストラル論を彼は1659年刊の自己の牧歌に付して発表した。これは1684年に英訳されて出版された。遅れて1688年にはフォントネルの『牧歌の本質論』が出、これも1695年に英訳された。これはラパンのように《黄金時代》の再現を目指すのではなく、田園の静穏を描くことに牧歌は集中すべきだという評論で、羊飼いの生活の静けさと余暇を描き、醜悪な現実農民の悲惨を描くのを避けて、《幻想》と《半真理》 (half-truths) を提供すべしとした (Congleton : 67 ; *TE* : 16)。17世紀中葉のウォーラー (Edmund Waller, 1606-87), ヴォーン (Henry Vaughan, 1622-95) 等にもパストラルの詩句が散見されるが、17世紀末に至って、牧歌は1世紀ぶりに変革されたのである。

イギリスではポウプが醜悪な農民の悲惨を避ける牧歌を実践したが、彼の古典重視はやがて、現実の自然界を描く新傾向と対立し、この傾向がイ

ギリス独自の（トムソンなどの）自然詩を産み出す源泉となる。トムソンに至ると、ラバンの規則ずくめの《黄金時代》描写、フォントネルの醜悪な農作業を隠す主張から離れる（ただしトムソンは理想の田園を描く際に《黄金時代》を用いてはいる）。そしてトムソンは、秋の嵐と洪水、農民の苦難を描く（秋 339-46）。この描写の直後には「荒くれた労働に明け暮れる手を忘れるなかれ」（秋 351）と書いた。

イギリスの田園詩は、こうした過程を経て現実の自然界を、その美しさと畏怖すべき物質性を直視するようになる。それと同時に農民の労働過重や土地を失う農民の悲哀を歌う政治性もパストラル詩の主題として復活した（このロマン派でのプロセスについては森松'13参照）。だが田園の美的表現の高度な洗練と、巧まらずして田園描写に入り込む政治性が合体した作風はクレア（彼はトムソンの『四季』を1806年に購入）を待たなければならなかった。

自然的時間の推移 クレアの描く時の推移は時計ではなく、「光の変化と太陽の移動、鳥や動物の動き、農業の手仕事」（PC 29）によって感じとられる。彼の詩はこの自然的な時の推移、ある季節、ある時刻の様相が詩的感性に訴えた印象の集積だが、そこへ農民の労働と貧困が重要な意味をこめて示唆される。季節それぞれの情景・農作業と同様、描写の一つ一つが味わいを持つから、極めて数多い作品から一つを選び出すのは難しいが、ペンギン文庫が『詩選』のほぼ冒頭に掲げる「朝の散歩」（'A Morning Walk', PC 33）をみるならば、赤い朝日、雄鶏の声、蜂の羽音、軋むドアを閉める前に砂敷きの貧しい自宅の床を眺めると、そこに熱心に這い入る日の光、日中の光を誇らしげに身につけた雲、夜露を振るい落としている羊、笑みを交わして農作業に出る若者と娘たち、日陰に移動するぶよ、草陰へと動く蝸牛、蛾、野兎……これらの集積が朝の散歩の爽やかさを読者に実感させ、同時にいつの間にか農作業の現場を示唆する。詩人自身は森

で憩うはずだったが、枝は夜露で一杯なので、

何度も私の足どりを受け容れてくれる森に来ると
休息の場をそこに見出そうとして見出せない、
なぜならまだ眠そうな木の葉たちに私が触れると
露の珠が、音立てて落ちてこないではない。 (ll. 57-60)

「受け容れてくれる」の原語は 'receives' なので、森との近親感が表現される。そのあとで朝露の爽やかさが 'patter' という聴覚的な一語で示される。歩き続けて花たちに出遭い、

小川のそばで露を落とすためにお辞儀をし続ける花たち、
夢から覚めたばかりで、私が愉しむと同じに朝の喜びを意識している。
私は摘みとることができない、朝の時間の この花々のかたち、
摘むならば私の仲間・花々の、喜びを打ち壊すのを知っている。
(ll. 65ff. 縮訳)

ここに表現される花たちとの同類感、また鳥に対しても発揮される——
「いまひばりはその巣から飛び立ち始める / 歌うためではない——私の近くのあざみに / おそろおそろ留まって、羽繕いを進める、 / 私が歩みすぎ
るまで、そのままその野あざみに」 (ll. 85-88)。

歌い手と自然の生命との協和は、今度はうら若い農夫と、か細い虫との共存へと拡がる——「羽虫が牧童を悩ますことはなかった / 現れたのは夏の川水が生みだす羽虫だけ / 刺すこともなく朝の喜びを牧童と分かちあうだけ / 草むらのなかで羽音をたてることしかなかった」 (ll. 117-20)。歌い手が座って近くの花を眺めると教会の鐘が時を打つ。だが

〔時の打刻を数えつつ〕小川が旅を続けるさまに目を向け続ける、
優しい曲線を幾度も描いて多くの水草の周りを流れるさまに。
あるいは静かな風が、この朝初めて目覚めるさまに耳傾ける、
さらさらと鳴り始めた葦の茂みを吹く朝風のさまに。 (II. 197-200)

実は時計が登場するのだけれども、時計以上に時の流れを実感させる川の行く末、風の立ち始めが、この「朝の散歩」を完結させている。時の推移とともに労働が始まることもこの詩は常に示唆しており、これが先に述べた「巧まずして入り込む政治性」である。

控えめな政治性 クレアの政治性は行間に隠されることもあれば、全面に出ている場合もある。農事詩での穏やかな政治性は、のちに述べる政治詩そのものより効果的かもしれない。「干し草作り」(‘Haymaking’, PC 56)では、労働の合間に川魚にパン屑を投げる少年少女を描く。「干し草作りの季節だ。赤ら顔のお日様が昇るやいなや / 黒鳥たちが、あちらこちらの牧草地の / 生け垣沿いに、声高に歌い始めていた、 / 空気は甘い匂いでいっぱい、 / 花々と牧草の匂い、幸せな雌牛の匂いが / 今は香気の流れを人の五感に投げ与えてくれる。 / この間、牧草地の楽しげな一隅では、若い農夫と乙女が / 熊手からだをもたれさせて、木蔭に足を運び、 / あるいは、一分だけ小川の橋に身を屈めて、憩いの時に / 下の流れの魚たちにパン屑を投げ与えている。 / 二人の幸せそうな叫びを聴き給え——そして合間に響く歌を、 / これは乙女が牧草地に来て初めての快樂の誕生日だ、 / お日様の下での乙女子の大きな笑い声から感じられる喜びほど、 / その半分でも豊かなものに聞こえる愉樂がまたとあろうか？」(全編)。「牧草地に来て初めての快樂の誕生日」——小魚が自分の与えた餌を喜んで食べたのが、干し草作りの労働に明け暮れた日々の中の時間の、初めての幸せだった。この幼げな少女の高らかな笑いが労苦の激しさを示唆する。

「羊飼いの少年」(The Shepherd Boy, PC 90) は、淋しさのあまり、番犬に語りかけ、さらに、終日「生きている者が周りにいないため」自分の影法師にさえ嬉しげに語りかける。

「樵夫」(The Woodman, PC 90) に登場する父親は、子供たちにとってあまりに遠い野のはてで、「棘のように林立する菅が居並んでいる溝沿いの道に / 鶴嘴つるはしと鉈鎌なたがまを、盗人の自己中な目から隠し終えると / 彼の道具袋たちには、春早く芽を出した木々からの / 花々や、花咲く小枝がしまわれている。 / 蔦の這う生け垣の、苔むす根もとどみつけた / 色鮮やかな蝸牛もまた、男の子たちを喜ばすために隠されている」(PC 91)。子たちは「このようなお土産を期待して」父の帰りを待ちわびている。グレイの「悲歌」での、労働から帰った父に走り寄る子たちへの言及に優る、具体性に満ちた描写である。この貧しい贈り物を、仕事道具(これを草むらに隠した)が入っていた袋いっぱい詰めて帰る父の愛情、またそれを喜ぶにちがいない子らの純朴が、樵夫の重労働と組み合わせられて読者に感銘を与える。

直接的な政治性 苦しい労働へのこうした間接的な示唆と並んで、社会状況を強い風刺意識をもって歌う作品もまたクレアに多いことは、かつてはあまり知られていなかった(1970年までに出了たクレア詩選には、この種の詩はほとんど姿をみせない。Dawson et al. が2000年に政治的作品を纏めたが、網羅的ではない。次の詩も長いため収録されていない)。「冬場、《潤沢》への呼びかけ」(Address to Plenty in Winter, EI, 310) は402行の長詩で、クレアの代表作の一つと思われる。冬の情景が、しかし家もない放浪者の視点から描かれる(詩の冒頭は「富者が知っている汝《幸福》 / (貧者にだけは知られていない汝)」——「丘という丘、谷という谷は、もはや / みて嬉しいみどりの衣服を着てはいない / 夏のころもは、大空の衣裳として / みな投げ棄てられてしまった。 / 降り続く雪は積もった雪と重なり合い / 小さな丘が、大

山となって光り輝く」(II. 79-84)。そしてこの作品の大半が貧者の苦しみと富者の驕りの描写に当てられる。自然物・雪でさえ、刺し貫くようにあまりに全ての場所を探索して降ってくる (I. 51)。「冬が今怖い顔をするとき、財もつ者は微笑むのだ」(I. 70)。貧者に与えられるのは「恐ろしく少ない惨めな給金」(I. 56) だけで「今は身を切る《冬》がやってきた / 願いはただ、雪の来ない暖かな片隅に / 住むところを見出すことだけ / そこなら吹雪から俺をさえぎってくれるだろうに—— / 剥き出しの野面で働いている俺 / 藪ひとつも暖かな片隅を与えてくれない / 貧しい働き手が震えながら立ちん坊 / 凍りつく両手を叩いてみる / そして足の指を温めようと / 氷になった雪を踏みならすが、全ては虚しい」(II. 35-44)。ここまで読むと、雪は自然の雪であるとともに、貧農を苦しめる難儀の象徴のように響く。だが田園詩らしく「夏の驟雨をさえぎってくれた / 木の葉は全て飛び去った」(II. 45-6)。

この詩では「《潤沢君》よ、君の贈り物をここへ与え給え / 全ての苦しみに退場を命じ給え / 中へ連れて入り、吹雪を閉め出し給え」から始まって、長々と《潤沢》に恵まれた場合の幸せな状況を描き出す。それ自体が、現実の農民生活との差異を示すのである。

そのときには《潤沢君》の膝に抱かれて
生まれて初めてうたた寝をし、浮かれて (II. 123-24)

(中略) 借金取りが、もはや立ちつくすことはあるまい、
やっぱり今度もカネを返してくれぬと知ることはあるまい。

(II. 157-58)

そのあとタバコだ、そのあと読書だ、
趣味がそのとき求めることが最初だ、
空想がそのとき必要とすることが根付くのだ、

こうした歓びが、次から次へと続くのだ。(II. 279-82)

読書のような、直接生命の維持に必要な不可欠ではないものも《潤沢君》があって初めて現実となる。しかし夢想から醒める寸前、語り手は「人の叡智は自然法則こそ書き表すが」(I. 323) 全能の存在である力について人は知り得ず、「人間の視界から隠されている《原因者たち》は / 『世に在るもの全てが正しき姿』(‘whatever is is right’, II. 45-6) なることを証したもう」(II. 327-28) と、ポープ『人間論』を借用したアイロニカルな詩句で空想を締めくくったあと、語り手の前に《現実》が立ちふさがる。夜も半分働き詰めて、わずか20ペンスを手にするだけなのだ(II. 348-50)。

……《潤沢君》が空に聳えさせる《大城郭》よ、
 絶望を終わらせるようにと貴君に命じることができさえすれば
 そのときにこそ、こんな役にもたない過激な言葉に別れを告げ
 悲しくて憂鬱なテーマなんかを歌い止め、(中略)
 貴君のご親切に、我が歌をもってお礼をするつもりなのに。

(II. 387-90; 402)

詩人と語り手とのあいだに距離を置いた歌いぶりで、詩法の幅広さをみせる——副題に「模倣詩文 (Parody)」と銘打って冗談めかし、雪景色を背景に、実際には貧農を歌うのだ。

一方「傷痍軍人」(‘The Disabled Soldier’, EI, 125; Dawson 非収録) には牧歌性はないが、物乞いをする兵士(自分を《手足の切れ残り》= stumps と呼んでいる)が語る愛国心を読者も信じて、「この手足の切れ痕が、一日で私の高貴な仕事を明らかにしましょう」という冒頭と終結に繰り返される言葉の衝撃を受け容れるだろう。特に ‘pegless stumps’ (I. 18), すなわち

「引っかけ釘にもならない手のもがれ痕」という言葉や、もし再び戦争が起これば、敵は「まるで手足をもっているのと同じほどの猛烈さで / どんな《手足の切れ痕殿》(=自分) がアルピオンの島から参戦するか」(II, 31-2) を目撃するだろうという愛国心をもじった表現が、この作品を本格派の反戦詩に仕立て上げている。「慈善の誕生」(‘The Birth of Charity’, *EI*, 379; Dawson 非収録) は、田園に豪邸を構える貴族が物乞いを追い払う一方で、貧しげな娘が彼に同情してポケットに預かった金子きんすに触る内容で、この時我が国に慈善が誕生したのだが、

〔豪邸では〕その目的で飼われている犬たちが咆えたけび始めた、
そして物乞いを戸口から追い払ってしまった。 (II, 3-4)

この2行が、田園と人びとから絶縁されている上位階級をよく表している。「物乞いする孤児の貴婦人への語り」(‘A Begging Orphans Address to a Lady’, *EI* 113; Dawson 非収録) は、おそらくはピーター・グライムズのような無慈悲な親方 (I, 11参照。なお森松 '13の第2章にピーターの、第4, 5章に当時の孤児の窮境の記述あり) に虐待されている孤児が、いかに世間から「与太者 (scoundrel)」(I, 19) として扱われているかが、ブレイクの「煙突掃除」に似て涙を誘う。これらの作品は、歌われる内容が日本のプロレタリア詩に似て、政治性が露骨だという理由で無視されてきたと思われる。だがクレアのこの傾向を意識して牧歌を読む必要がある。これらの他に Dawson et al. は、散文を含めて多数の政治的・社会問題的作品を収録している。

牧歌と貧困 牧歌的作品に戻る。「四月の雛菊に」(‘To an April Daisy’, *EI*, 135) では、この雛菊 (引用中の「お前」) が田園の少女、さらには歌い手その人や田園の住人の象徴となっている。

《時》も《場所》も ものともしない美の宝玉よ、ようこそ！
牛糞のそばに 無頓着にも這って現れるお前、
皺だらけだったお前の顔に、姿かたちが和らいでゆく、
そして誇り高き者にはない魅力が、お前を飾っている。 (II. 5-8)

最終連では「移ろいやすいこの場からお前が去りゆくときには / お前と僕はしるしの涙で、来年の再会の願いを交わし合うだろう」(II. 21-4)と雛菊を親友、あるいは恋人扱いにする。象徴性の中に、位の高い者とは異なる環境に生きる者の、真の美しさを描き出す。

「ロウビン・クラウト、時勢を風刺しての独白」(‘Lobin Clouts Satirical Soliloquy on the Times’, *EI*, 137; Dawson15にも収録)では、あまりに苦しい世の中に生まれた労働者が「パン以外の何物も得られずに働かねばならぬくらいなら / 貧乏人はどたまをぶん殴られたほうがましさ」(II. 5-6)と言う。先の「冬場、《潤沢》への呼びかけ」におけると同様、語り手と詩人のあいだに距離を置き、クレア自身の過激な言葉ではないとして方言を多用しているが、それでも生前には発表されなかった(See Dawson et al. 248)。雇用主をなじって、

一回でもアクマがやっこさんのナキガラを手に入れた日にゃ
決まったこっちゃん、あいつの人を馬鹿にした言葉は全部おしまいにな
るぞい、
あいつが板切れでできた着物 (= 棺桶) を着せられた日にゃな、
うじゃうじゃ蛆虫どもが、あいつの体液を吸い尽くす日にゃな。
(II. 12-5)

あいつの犯罪はいっぱいあって、けったいなほど悪いんけ、
あいつが びんぼ人の働くもんを騙して給金をかすめ取った日を、

きっと請け合うで、きっと呪う日が来るちゅうことを。
ああ奴さん、働くもんにちゃんと払っとけば えかったと、
人を馬鹿にした言葉で、嫌がらせせんときゃ えかったと、
思う日が来るで、だから待ちゃええ、報いがあいつに来る日を、
あっしの願いどおり、奴が受けてあつたり前の罰くらう日をな。

(II. 20-6)

「おお残忍な戦争よ」(‘O Cruel War’, *EI* 380) は、質朴・優美の象徴である
「黄花の九輪櫻」(cowslap=cowslip) が最後を飾る自然詩だが、《戦争》に呼
びかける語り手(女だろう)が、

あなたの狂おしい戦禍の手から、わたしのハリーを無事に返して！
どんないいことも彼の帰還を待ち受けてはいないけれど。//
おお血まみれの、血みどろの残忍な戦争よ、
わたしが嘆くのはたったの二年だと彼は誓ったのに、
三度の夏が、黄花の九輪櫻の花床を敷き延べたのに、
&いままだ、彼は帰国を許されていないの。(7-12)

ここでは‘but 2 years’の‘but’と、次行の‘But 3 times’における‘But’が
まったく別の意味になる効果が反戦詩として優秀である。語り手を母親と
して読むこともできる。

「ドビンの死」(‘The Death of Dobbin’, *EI* 84; Dawson 非収録)のドビンは、
普通名詞としては農耕馬の意である。だが標題からして敬意をもってこの
単語を固有名詞として示す。彼は「人と馬の模範」(15; 233) だったし、
詩行の語る「君の旧友」, 「君の古い仲間」は全て人を指す。詩人は彼を人
と同一視する。だがその死後、人は彼を忘却の淵に沈める。だが

《田園の詩神》は心の中で喜んでいるはず、なぜなら君の旧友たちのあいだには、君の記憶が今なお生き残っていると詩神は知るからだ、そこでは、価値ある行為はかならず生き続けるからだ。 (20-2)

しかるに彼が老いると、俗世では彼のもたらす「利益が消え去った、すると彼を讃える言葉もまた去った」(52) のだし、彼を「あその草もない土地に追い出して自生させ / その後の運命の指示どおりに、やつれるなり死ぬなりさせた」(7-12)。だから《田園の詩神》よ、

貴殿こそ、《ドビンの死》を詳しく語り給え、
貴殿の貧相な詩歌の中に彼の美点を讃え給え、
どんなに貧相だろうと、貴殿が詩に歌わないからには
気の毒なドビンの美点は、彼の遺骸とともに朽ちるからには。
詩人どもが近づくかもしれぬ (だが彼らの助けを仄めかすのも恥、
こんな貧しげな主題、利益が不定の詩作なのだから)、
だってドビンがあとに残したものは、決して、あくどいお世辞、
親切ぶりを、詩人どもから引き出すことがないのを我々はよく知って
いるから。
どんな利得も念頭に置けないのだから、この仕事は貴殿の務めなのだから。
(II. 59-67)

貴殿とは実はクレア自身のことである。体制内の詩人と「貧しげな =lowly」自分との差異を鮮明に打ち出している。そしてドビンの見事な労働(彼は導く人間がいなくても農作業を見事に完遂できた =II. 201-06; また子供でも危険を感じずに彼のそばについて歩けた =II. 186-89) と死によって、農民一般の、勤勉かつ優秀な労働と死を歌っていることはもはや明らかであろう。

鞭ひもが彼の脚に、傷跡をつけることがなかった、
鞭も鞭打ちも、まったく彼には必要がなかった。(II. 211-12)

これも正直で勤勉な農民の姿と重なる——なぜなら次には「我々」が出て人間（農民）を歌う態度が明らかとなるからだ。利得の生じる場合には称賛の言葉が聞かれるけれども

それが去ってしまうと、そのときには、称賛の全てが^{うっ}虚ける、
我々の値打ちは消え失せ、我々への称賛もまた同じ。
蜘蛛の巣のように儂い世間の称賛は、《長く》浮かび続ける、
流れる潮の上のあぶくが《長く》浮かぶ束の間とまた同じ。
(II. 223-26)

引用最後の2行は、ほぼ同じ詩句で冒頭(II. 7-8)に出ていたもの。馬から、人馬全てを含めた農事従事者への転換が見事だ。そしてこの詩の最後の7行は、冒頭部(II. 10-16)の7行を繰り返すが、冒頭で馬を語っていたのに、この終結では馬同様、農民像が浮上する——

君が背負って運んだあの全ての重荷にもかかわらず、
これまでに君がし遂げた価値ある労働全てにもかかわらず、
ついには塵芥^{ちりあくた} (cumber grounds; see Dawson 334) として地に臥す(悲しき運命)とは。

気の毒な、傷ついた老ドビンよ、我々も君の身から
世間の欺き・騙しを遮るように、警鐘を鳴らされて当然だ、
君は、馬と人 双方の規範・典型として、できる全てを成し遂げたときに

我々がどんな仕打ちを受けるかを示してくれているのだ。

(II. 227-34= 最終行, 丸括弧内は森松)

これは明らかに牧歌の一種・農事詩である。社会への抗議は表層のすぐ下に埋め込まれる。「あの全ての重荷」, 「価値ある労働」, 「世間の欺き・騙し」など全てが, 人間社会の矛盾を弾劾している。 그레이の『悲歌』に似ながら, 政治意識はより強烈である。自然界の生物を描きつつ人間社会の悲惨を慨嘆する様は, 他の初期作品にも多用され, たとえば「冬に歌う雲雀への言葉」(‘Adress to a Lark Singing in Winter’, EI 99) では, 何の愉しみもない寒冷の季節に希望を持って歌う鳥に, やがて失望しますよ, なぜなら「私がよく知っているから, 私は嫌というほど / 不幸を我が物にしてきたから」(II. 23-4) と歌い, 私の20年の経験から「《希望》の騙しの舌」は「みんなにせ物」(II. 44; 46) と言えると教えるのだ。

これと似た内容の作品は「野の雪の上に臥す冬場に迷える獵犬をみて」(‘On Seeing a Lost Greyhound in Winter Lying upon the Snow in the Fields’, EI 202; Dawson 11) である。この詩でも代名詞だけを入れ替えた「できる全てを成し遂げたときに」が, 人間もまた犬と同じに世から無視されることを描き(II. 7-8), 無意味な物を創造しない神を示唆(II. 27-33)して「犬も人間と同じく《自然の鎖》の / 一つの輪をなしている」(II. 25-6) と諧謔し, 語り手は言う——「心の虚ろな愚か者たちが / 君への私の優しさを嘲笑うけれども / いまやって来た私の家へ君を連れて行こう, / だから身を起こしていっしょに来たまえ」(II. 37-40)。すると犬は, ものを言えないまま, 「尻尾で話をしてくれる」(wags his tale; l. 43) ののである。

20年代の詩編 初期の作品に, 実際にはこのように社会批判が多いのに, 1820年代に入るとクレアの牧歌性に深刻な政治性が入り込むと論評される(See PC 146-47)。だがむしろそれは「組織された, ラディカルな扇動に加

担する類ではなかった」(Johanne Clare 23)。政治運動とは無縁に、貧しい寒村の農民として、自分と村人の経験を詩に歌うことによって、ウェルギリウスにみられるような、隠された政治性を発揮した作品が多くなる。

「何気なくみる風景」(‘An Idle Hour’, PC 148)では、暇な時間に見る堤の花々は、日中の熱気にうなだれて水を欲しがり、牛馬が川に飛び込む際に跳ね飛ぶ泥土を喜ぶ。一方水草は必要以上の水気の中に棲息している。この穏やかな自然描写のあとの詩の最後の2行は

世の中とちょうど同じ。あるものたちは頑張っても幸せに恵まれず
他のものたちは馬鹿騒ぎをしながら、いつも多くのものを得ている。

(PC 148)

引用最初の行の「あるものたち」が貧窮の日々を過ごす農民、2行目の「他のものたち」が有産階級を示していることは言うまでもない。

「夏は去りぬ」(‘The Summer Gone’, PC 69)では、夏の「書が閉じられ」た今、冬の到来も間近と思わせる雨が描かれ、濡れそぼって道を歩む小綺麗な娘がぬかるみを歩くのを優しい羊飼いが、仕事の合間に彼女の歩みを助ける(II. 17-8)。生け垣の枝降ろしをする職人は「うっとうしい風雨のためにずぶ濡れになりながら、枝払いを / 休みなく続ける。鉈を振るってもほとんどからだは暖まらない / 枝を打つたびごとに、水滴が巣から飛び立つようにどっと群れ飛び / 四月に荒れる嵐のように、庭師のあたりにパタパタと降りそそぐ(II. 19-22)。——このように労働現場と日本でいえば晩秋に当たる季節感とが一体となって表現される。引用3行目に、原文では‘large swarms of drops’という暗喩があり、一斉に飛び立つ蜂の群れを思わせる。次の連の初めの2行では、子が遊ぶ描写かと思わせながら

少年たちは何度も、ゆれ動く木の上までよじのぼって
 緋色の服を着た狩猟者がそばを急いで通り過ぎるのを見る、
 彼らは、できることなら狩人たちの陽気な騒ぎに仲間入りしたいが
 陰気な労働が彼らをつなぎ止めようと縛りつけている。 (II. 28-31)

次の5行を読めば、男の子たちが鴉などの鳥追いに従事していることが明らかとなる。終わりの27行は秋の風物詩で、水を飲みに来る農業労働者がいなくなったことを嘆く声を小川が発し続けることも歌われる。さらに「冬の兆し」(‘Signs of Winter’, *PC* 73) となると、自然描写の中に「庭師はただ一人、営々として仕事 / 羊飼いたちは歌もなくとほとほと野を渉る」(13-4) という淋しげな労働現場が描かれる。描かれる人びとと同様な貧しい仕事を幾種類も経験したクレアが「心地よい場所」(‘Pleasant Places’, *PC* 80) として描くのは「頭上で枝を交える木々のあいだの、古い狭い道、 / そして小道の踏み越し段——その上に登れば / 遠い空に尖塔が覗き、伸びているのがみえる道の踏み台 / そこでは《驚き》が小休止して「神々しい」と叫ぶ。 / また折れ曲がった樹木でぼんやり暗くなった古池—— / これらこそが私にはピクチャレスクの趣き」(3-8)。18世紀以後半来のグレイ、コウルリッジ、ワーズワスが《崇高感》に打たれて、「神々しい」と叫んだモンブランやシャモニの谷に替わる自己流の(貧農のための)ピクチャレスクの風景が、皮肉混じりに歌われる。

初期に書かれたとクレア自身が語る1821年発表の「ヘルプストーン村の緑地」(‘Helpstone Green’, *EII*. 11 ; Dawson 29) は、《囲い込み》への本格的な抗議である(よく似た詩編「囲い込み」[‘Enclosure’, *EII*. 11 ; Reeves 22] も存在し、そこでは「囲い込みがやってきて、労働者の諸権利の墓を / 踏みしだいた上、貧者を奴隷とした」[19-20] と歌われる)。かつて《自然》が描き出すままに柳が風に揺れ、山査子^{さんざし}が蔭を作っていた緑地 (II. 2-4) なのに「いま

は樵夫の斧が、草木の蔭をむさぼり食う / 斧の下で、森林の全てがひれ伏してしまう、 / 彼らのはうねり流れる小川の流路を変え、 / 君の牧草地全てを鋤鍬で耕し、 / 君の野面の樹木、灌木に、ひとしなみに / 何のあわれみも示しはせず、 / 振り上げた斧が慈悲一つ与えはせず、 / いのちを奪う一打を食らわせてゆく」(‘Helpstone Green’, ll. 9-16) ——ここまで読むと1行目の「お前たち傷つけられた野よ、明るかった野よ」が生きてくる。そして第3連では緑地を歩くたびにかつて美しかった小川、樹木、緑地そのものが目に浮かぶさまが描かれ、第4連で子供時代の鳥の巣探し、花摘みが語られ、第5、6連で緑地を輝かせた立金花^{りゅうきんか}の黄色、朝の牛飼い・夕の搾乳婦の声が消えたと歌われ、今の光景は「かつての景色をすっかり拭い去ってしまうので / しばらくのちには、この場所が、かつては / 緑地であったことがほとんど判らなくなるだろう」(ll. 46-8)。そしてこの述懐は、第2詩集『村の吟遊詩人』(*The Village Minstrel and Other Poems*, 1821)の第22連での、雑草の中に這うようにして埋もれ咲いている野花を見つける吟遊詩人ルービンの心と連動する(ルービンはクレアの分身、引用の君は野の花) ——

君は名もなく、ルービン以外の誰の目にも留まらず、
底辺の天才のように、^{ひるひなか}昼日中咲きながら死んで行く。

これは次にみる、夜にだけ咲く桜草と好一對の、貧しい底辺の昼の花を美しいとする歌だ。

寒村と自己を同一視 今度は中期の作品「夕べの桜草」(‘Evening Primrose’, *The Midsummer Cushion* : 432) を読みたい。全編を訳してみる(*The Midsummer Cushion* は作者の生前には未刊) —— 「ひとたび太陽が西に沈み / 露の珠が夕方の胸に真珠を与えるとき / 月の光と同じほどに淡く、あるいは /

月に連れ添う星ほどに淡い色をして / 夕べの桜草が、露珠に向けて / その繊細な花々を、今宵新たに開く。 / そして光を備え、人を避けるこの隠者は、 / 夜に向かってその華麗な花を浪費する。 / 《夜》は、この花の優しい愛撫に眼を開けもせず、 / この花が持つ美しさに気づきもせず、 / こうしてこの花は《夜》が去りゆくまで、また / 《朝》が眼を開けて顔を出すまで、咲き続ける。 / 避けることのできない朝の凝視に恥じらって / 花は気を失い、凋みゆき、枯れてしまう」(全編。《夜》は暗い世も示唆?)。

これらの詩を読めば、人に知られずに花を歌う自分とこれらの花との同一視が、否応なく感じられよう。これはグレイの「悲歌」とはまた異なった(憐れむ対象が自己を含む)独自性を醸し出している。さらにこんどは(以前にも引用した作品だが。See 森松 '93)「うた」(EI, 100)をみるなら

野育ちの蘭草の育つ沼沢、湿地のぬかるみのわだち、
 野薊と雑草の、でこぼこだらけの休耕地の土壤、
 立金花と雛菊の低湿地と、くぼんだ谷間、
 君たちこそ、私の歌草の主題の、最も甘美なるもの。
 自然の粗野なぼろ布を纏った自由のままの荒地たちよ、
 このとおり針金雀^{えにしだ}児に身を包む君ら褐色の荒蕪地よ、
 野育ちの私の眼は、恍惚として君ら全ての姿を敬慕する、
 君らは、我が胸の底のここなる心と同じく愛しきもの。 (1-8)

そしてクレアはこの地、これらの花を「自然の《屑》」(23)と呼ぶ。自分と「自然の《屑》」との同一視が、底辺の田園と、世俗が見向きもしない価値あるものへの礼賛を伝えてくる。初期作品にもどって「ヘルプストーン村」('Helpstone', EI, 156; Dawson 3)を読むなら、冒頭から

呼びかけるぞ、身分卑しきヘルプストンよ、君の峡谷平野はだだっ広く
君の粗末な村は、みすぼらしい頭部をもたげている、
君は《崇高》にはほど遠く、《名声》にも縁遠く、
どんな吟遊詩人も君の名を持ち上げて誇らず、
詩人の歌のなかに君の名は響いたことがない、
そこではあくせくした労働が時間たちを駆ってゆくだけ。 (II. 1-6)

にもかかわらず歌われるのはこの鄙びた寒村への真実の愛である——

呼びかけるぞ、こんなにも私に近く、私に親しい、辺鄙な景色よ、
教会の、小川の、田舎屋の、そして立っている木の景色よ、
それでも常に無名の私が、繰り返し君の歌を歌うぞ、
君のあちこちを散歩して、数々の君の美しさを口ずさむぞ、
《時》の長さがいよいよ親しいものにする親愛な古里の村よ。

(II. 47-52)

ここでも川や樹木に彩られた緑地の消失が嘆かれ、この《変更》に溜息し、残忍な斧に樹木が斬首され (beheaded=l. 88) た村、「銀色の野草が小さな茎を風に揺らせ / 色青ざめたライラックが控えめに、みすぼらしく育っていた村」(II. 100-01) への愛がほとぼしり出る。

「あの黄金の年月の、至福のエデン園よ / (中略) この空虚な世間と私が終わりに近づき / 《時》の空っぽになる砂時計が、落とす砂をほとんど残さなくなるときにも / 私の生命の衰微にも一つ慰めをもたらしてくれ」(II. 163 ; 166-68) と語るのも、「今や悲しいかな、あの時の景色たちはもはや存在しない / 君の《生》の誇りは私の《生》の誇りとまさに同時に終わった」(II. 115-16) に顕わにみえるような、自分と村との同一視がなせる

業なのである。

農事詩の中に自然描写が さてクレアの第3詩集『羊飼いの暦』(*The Shepherd's Calendar*)が、出版業者ジョン・テイラーの改竄を受けて1827年に発売されたときにはほんの数冊(1829年までにも僅か400部)売れただけだったのに、1964年にエリック・ロビンソンとジェフリー・サザランドが編纂した、改竄を排除した新版を出すと、5000部以上が売れた。読書界がクレアを底辺の無学な詩人とは考えなくなったこともこの変化の理由だろうが、《自然》と農村をありのままの姿で、かつ庶民の眼で見て呈示したことが、物質文明に冒されてしまった20世紀に、新風をもたらしたのが何よりの原因であったろう。本稿はこの新版とRobinson et al. '96 (*MI*)を用い、紙幅の制約上、印象的部分に少し触れ、最後にこの作品の特徴を最も良く示している「六月」の全訳を示し、詩の性格を明らかにしたい。

「一月：田舎家の夕」のほうでは、暗闇での殺人、絞首台が怖かったこと、魔女や妖精の話羊飼いの妻が子らに語り、また詩人の母の優れた夜話・お伽話の思い出が記される。この第2歌は出版業者の要請に添って、知的読者には珍しい庶民の情景を提供したものであろう。だが第1歌「一月：冬の日」は峻烈な農耕詩。嵐の夜、酒場に集まる農民が穀物の価格を心配して語る場面から始まり、いつしか梟さえ予期しなかった早い朝となり、飼葉係の少年が今日も「足を引きずって出かける——白霜の垂れる生垣を通り / 凍てついた原野を渡り、歩めば沈む雪道を踏み通り / 進みつつ両手の指に、吐く息を吹きかけて暖める / そして大きな声で鳴き声たてて食い扶持を求める / 牛たちの群れを寒々とした囲い地の中に眺める」(38-42; 極寒の中の少年の労働を示唆する)。このあと、主人である羊飼いを風よけにしてそのあとを追う雪道の犬(同51-4)、僅かな餌を得たあと、寒さを逃れて藁にくるまる飼い豚(同63-6)、偶然こぼされた穀粒を求める雌鳥(同67-70)、納屋の穴に隠れて鳥を狙う猫(同71-4)など、人

のまわりの動物たち（農民の象徴でもある）が次々に登場し、農民の生活ぶりが示唆される。毎日《夜》が凍らせたまま放置してゆく池の一隅に集まっていた鶯鳥たちは、少年がやってきて大槌で池を割るのを待つ。「押し黙って悲しげに少年の助けを待つのだが / 穴がまだできあがらないうちからはやばやと / 悦びの叫びをあげて、少年の耳を聳するのだが / これを逃すまいと喜んで精一杯水をばしゃばしゃと / 虚しくもはねかしてみ、池は再び凍るのだが。（一月「冬の日」：91-6；人と生物の協働が主題に絡む。また期待して待った欲びが単純である上に、やがて虚しく去るという象徴性を帯びる）。

夕べには庭師が遠方の森林と野から、靴にこびりついた雪を蹴落としつつ帰宅し、床に薪を投げ出し、妻に暖炉の火を大きくしてもらって冷えた軀を温める（同205-14）。

働く娘たちの魅力 「七月」は搾乳婦の日焼けした可愛い顔から始まる――

《七月》は今年もまたこの季節の初めを
ミルク搾りの娘の顔で幕を開ける、
日焼けして赤らんでいるが可愛い顔で。 (七月：3-5)

干し草を刈り終えて馬車の後ろを歩む娘たちの姿は、

娘たちは馬車の後ろを熊手を引きずって歩む、
その軽やかな衣服は、風のなすままのかたち膨らみ
縮れた髪は、束になって風に震え、
雪のように白い彼女らの胸はほとんどむき出し、それが
干し草の中にちらちら見える有り様はまことに魅力的、

まだ残る山査子の純白の花が緑葉の中に見えるように。(七月：31-6)

(「純白の」と「緑葉の中に」は森松の恣意的追加) まだ青々とした干し草の後ろにひらめく純白の胸は、当然山査子の緑葉と白い花を想像させる。労働途中の野面での食事の際には、はにかんで《^{つの}角》(同：73. コップとして用いられている) にビールが注がれるのを辞退する娘に、恋する男が当たりの目を盗んでポケットから果物を取り出し、娘の口を潤す(同：71-81)。「七月」はこのあと、搾乳婦や草刈り人、馬追の少年などの労働を、美しい自然描写——「そよ風も止み、ものうげな木の枝に / 今はもう 舞い踊る葉は一枚もない。 / 丘の上の すずがやと / 蜘蛛の糸とは じっと動かず / 雌雷鳥の翼より落ちた羽毛は / 小川の水面に張りついたまま / 動きもやらず、しかも、流れの中の / 底に沈む石よりも重たげに見える」(同：289-96) ——一例として挙げたこの詩句のような精巧な描写で包み込む。

「十一月」の冒頭にも、霧に閉ざされた野の描写が見られる。訳文に表現しにくいが——

村は朝から真昼まで、霧の中に眠っている。
そして、まるで月が、夜の巡行をなし終えたあとにも
太陽が眠っているのを知って、太陽の代役をしているかのように
光なく青ざめたまん丸な顔した月のような太陽が
この霧の中を、何とか泳ぎ渡ってくる (wades) としても
羊飼いたちは何日も野面に出ていて、なおかつ
布きれほどの空さえ見ないこともあり得る——目隠しをされた彼らは、
繁みも樹もないかのように見える平野をなんとか跡づけ
目では見えない羊の群れに、当てずっぽうに口笛を吹く。

(十一月：1-9)

野兎までが警戒心を無くしてしまう深い霧のために

かくて《昼》は夜になったようで、(野兎は)目覚めようとして
果たさず、子梟は真昼に隠れ家から飛んで出る。(中略)
牛飼いの少年はこの昼間を夜の夢ではないかと考えたり
一人霧の中に孤立したりして、しょっちゅう怖くなる、
幽霊が目を覚まし、昼間なのに墓から出るのではないかと。

(同：18-9；25-8)

日本よりも北に位置するイギリスでは、秋も終わりにになると「風たちが目覚め」(同：74)，

これまでは静かだった森が、突然、歌い始める、
冬が戻ってくる歌だ。そして雲が雲を追う。(中略)
羊飼いは、まもなく四囲を支配する天候の変化を
単純素朴なやり方で予知することがよくある。
のろくさとしていた驢馬が野生的となって、いななき、
年老いた雌牛たちが谷を勢いよく、夏の歩みで降り、
近づいてくる嵐を嗅ぎわけのを目聡く見つける。(同：75-6；82-6)

これらの引用の全てに、農民の働く姿が登場していることに注意していただきたい。

耕作農夫が羊飼いの小屋へ 鳥たちが嵐の襲来に驚いて鳴き、また仲間同士で身を寄せ合う描写のあと、土を柔らかく耕していた農夫が嵐を避ける姿を描き出す——「農夫は突然の嵐が吹き始めるのを耳にして、大急ぎで / 雨具もないままの耕作から、雨宿りする場所を探す / 上衣のボタンを顎

の下まで引き上げ、 / 柔らかで雨を吸った土壌の上を足早に逃げる / 上空の雲は激しく激怒したかのように沸騰し / 風は横殴りの雨をしたたかに叩きつけるので / しばらく呼吸ができなくなって彼は後ろ向きになるが / それから向き直ってスピードを増し、 藪草の平原に / ぼつねんと建つ羊飼いの小屋へ一目散。(同：117-26)

「一二月」はこうして荒涼とした農地を残して幕を閉じ、「鋤鋤を停止させ、農地を雪の中に隠す、すると / 寒気がやってきて川の流れを冷たく緩慢にして閉じこめ / 生け垣の上では紫色のスローの実が熟し始めて / 小鳥たちの餌を準備する」(同：176-79)。このような自然美と農民の労働の歌としての『羊飼いの暦』の特徴を念頭に、以下「六月」をみる。紙幅がないために、べた組みで読みにくいが、全編を示すほうを優先する(以下、訳文中の丸点部は特に美しい自然描写を、斜点部は労働描写を指す。なお「一二月」には鈴木蓮一訳[英宝社]あり)。

「いま夏は花盛り、自然界のつぶやきは / 自然の 灼熱の花のまわりで黙り込むことがない / 塵のように小さな昆虫も 動きを止めることなく / きらきらと踊り、陽光の中を旋回する。 / 緑の森を飛ぶ虫も 花を訪なう蜜蜂も / 羽音のメロディを奏でて 倦むことがない。 / 農場の生け垣には今を盛りの花々が絡む—— / 昼顔の大きな鐘が奔放に跳び跳ね、縞なす忍冬は / 渴えたように首の細い花をもたげ、その花は / 降り敷く露と甘露の雨を求めて口を開く。 / これらの花は ありとあらゆる茂みのまわりに 麗しく乱れ咲き / 灼熱の太陽に向けて 奔放な色をうち抜げる。 / ^{まだら}斑 模様の蜘蛛が夕べの暇ひま、小枝や葉の上に / その絹の 網模様のレース [= 蜘蛛の巣] を織るところでは / まるで妖精の露に濡れた衣が干してあるかのように / それは毎朝、詩人の眼に映ずるのだ。 / 小麦は膨らんで穂となり、五月に咲いた野の花と / その豪華な光景を 下方に置き去りにする。 / 五月には、輝くような野原辛子と赤い雛芥子は / 雲のように

多彩な色をして奔放に拡がっていたので / 日の出のころのこれらの花は
想像の眼には / 彩り豊かな天空が 地に映し出されたかと思えたほどだ。
/ それは子兎のねぐら、雲雀や鶉の巣となって / 麦よりも易々と、小学生
の背丈を越えて高く / 草取りの人びとの仕事を無視して伸び放題。 / この
人びとは この六月には毎朝、楽しげな群れをなして / 文楯と熊手をも
ち、柳に縁取られた牧草地へ出向き / 香りのよい草の山を 長い列にし
て作る。 / するとそこでは昔ながらの訪問者、朽ち葉色の / 干し草どきの
蝶たちが 上へ下へと舞い踊る。 / 虻もまたやって来て、雀蜂さながら、
憶病な娘をこわがらせ / 牧童の世話する雌牛たちを 池や木蔭に追いや
るのだ。 / 牧童は、犬たちが押し留めることができなくなると / 作りかけ
の麦笛を捨てて 揺らめく熱気の中へ / 駆け出して行き、大声で牛たち
を呼ぶほかはない / 走りまわる雌牛に 小麦を荒らされないようにする
ためだ。 / 牛どもは興奮して 危険をも ものともせず / 狩人のように牧
場の小川を跳び越えて / 狂おしげに慌てふためき 花咲く空豆畑を突進
し / 脚止めて味わう暇もない小麦を 踏みにじってしまう。 / 労働は倦み
疲れた気分で打ち続き / できるなら 林の木蔭で休みたいと思いつつ /
珠の露乗せた草の上に 刈り取り人夫の群れは身を屈める。 / そこへはし
ばしばジブシーの 飢えて旅する驢馬の眼が / 牧場の小道から 憧れる
ように向けられる / 刈られて倒れる草の音が 驢馬にも聞こえるからだ。
/ 耕作農夫は休閒地の谷を 汗流しつつ進み / 日照りにひび割れた畦溝を
ゆっくりと辿りながら / いくたびも 喉が渇いて小川の水をすする。 / そ
の時 農夫は 岸辺の藪を荒々しくかきわけるので / 冷たい水を求めつ
つ 彼はしばしば 数珠掛け鳩が / のんびりとした巢に卵を抱く休息を
乱してしまう。 / 彼はそこで 木蔭を立ち去りがたいかの様子で / 息を吸
い、暑くほてる顔を拭うのだ。 / 羊飼いたちの暇な時間は今や終わった /
もはや彼らは 生け垣の枝の下や / 木蔭に寝そべる堤、寄りかかる踏み

段に留まりはしない / 荒野はいま夏の友たちを しばし失うのだ。 / かん高い口笛、吠える犬、叱咤する声が / 毎朝 休閑地の檻の中から 鳴き声立てる羊たちを / 柳の木蔭が伸びている洗い場へと 駆り立ててゆく。 / 檻の中で汚れた体を清めるため 羊らをここへ追い込み / 今度は 日の照る芝生でまた乾かして / 編み垣で囲われ 榆や大楓に陽を遮られた / 毛刈りのための檻の中へ 彼等は 羊たちを帰らせる / あるいは、脱穀のための納屋の床へと。——ここでは / 歌や笑いや物語の切れ端でもって、彼等は年ごとの / 労苦を和らげる。するうち楽しみなビールがまわされ / 年老いた男たちの心を弾ませ、彼等は誉めちぎる / 昔の農民のいまは擦り切れてしまった様ざまの習慣を。 / その一人は語る、縮こまる羊が恐れに打ち震えながら / この男の安全な大鋏の下で 毛を刈られていくあいだ / 詩人にも歌われず 《高慢》にも忘れられてしまった様ざまの / 事柄を思い出しつつ——彼の若かった頃のことである / 毛刈りの男たちが毎年集まると、朝食にはミルク粥でいっぱい 巨大な鉢が真ん中に据えられ / その中には毎年、どのように砂糖が筋を引き / 干葡萄が点々と見えていたか / またこの鉢を娘たちが食卓まで運べないので / 陽気な車座の中から必ず一人が立って / どのように手を貸したか、そしてもし悪く取るなら / 親切を押し売りして キス一つの報酬を盗もうとしたか。 / 素朴な飾りのある大きな石の水差し / 銅の縁金付きの 曇った一パイントの 角ジョッキ / これを傾けて、元気良く、酒蔵にある一番の美酒を飲み出し / 田舎びとたちの 健康が祝されたのだった。 / こんなとき、昔の農夫は素朴な調べを歌ったものだ / 太陽の目を唄で自覚せ、唄で太陽を西に送った / あの古き良き時、革袋が木の実色のビールをたたえていた / あの古き良き時の絵姿のような唄を歌ったものだ…… / こんなふうに老人が 昔の流儀が廃れたことを嘆くうちに / 大鋏の苦勞が四方山話に打ち勝ち始め / 四方山話を止めさせてしまう——するとこの

憶病な / 羊にかんしては羊毛の刈り取りが終わり、この羊は / 恐しげに
跳び退く——この羊の脇腹には 彼が / 驚き喜びつつ裸になった膚を震
わせるとき / タールの銘標が手で捺印される。 / すると屈強な若者が 新
たな羊を引いてくる。 / 大鉄持つ男の手元へ 羊が投げ込まれると / 彼は
額の汗を拭い、また話を始めるのだ。 / 簡素な生活が提供していた古い風
習の半分を / 時の流行の傲慢なしかめ面が捨ててしまったけれども / し
かし 木々が冬枯れたときの緑の蔦のように / 冬にも命を奪われない
いくつかの良ききりがある。 / そして今 羊毛の刈り取りが終わった
とき / 無邪気な娯楽とともに いくつかの古めかしい習慣が / 村人の陽
気な仕事を締めくくる——誉められれば喜ぶが / 人に誉められるのも恥
ずかしい気の弱い娘が / 一番気にいった花を捜しにいく、森や野の花で
はなく / どんな農家の庭にも生えている花を、 / 彼女の化粧のような色あ
いの 八重咲きの西洋薔薇 / 金色のレースの飾り付きの 輝くパン
ジー、 / 羽のような花でいっぱいの高い房のついた キンレンカ / そし
て、あずまやの戸に登っている忍冬、 / そして たくさんの斑の色の美女
撫子 / そして 淡い桃色のエンドウ、暗紫色のトリカブト / 夏のなかば
まで 花盛りを続ける / 白色と 紫色の縞撫子 / 主婦たちの大好きな
古めかしい花である / 甘い匂いの ただひと色の 朱のセンゴクマメ /
蜜蜂の巣に似た、花の垂れている / 灰青色や 夜目にもあやな茶色のオ
ダマキ / (その昔ながらの野生の兄弟の夏の花にまじって / 今だ野に咲いてい
るところでは 荒野の花とされるのに / 全ての農家の庭の お気に入りの養子のよ
うな花) / 針エニシダの藪、斑色のヒース、金色のエニシダ、 / 眠っ
ている田舎者のように あんぐり口を開けた金魚草、 / そして乙女等の雪のよ
うな帽子的リボンのように桃色の / 羊の毛刈りをする人々に捧げる石竹
(これはしばしば / 乙女らがよゆきのドレスで運んでいて、男たちが奪おうとす
る)、 / そしてまた 日没の頃の紅の西空のように深く赤い / 輝く色合い

の「おめかししたバス」の名の雛菊、 / マヨラナのノット花壇、赤野ばら、リボングラス、 / そして 娘は誰もが選ぶ夾竹桃、 / 「少年の恋」の名のニガヨモギ——これら 村中の全ての庭が / 自分のものだと主張する お馴染みの花 / これらを乙女たちは はにかみつつ嬉しげに集め / 夜の準備のために 花束にする、 / 愛と恥じらいを交えて 全ての男に与えるのだ、 / 男たちが年ごとに貰えるはずの 彼女からの「毛刈りの花束」を。 / 男が 風習になっているキスを求めると、娘は微笑みを押し殺し / 半ば幸せを渴望しつつ、そっぽを向き / 尻込みして顔赤らめ、失礼ね などと口では言い、 / 振り返って笑みを見せ、追いかけてほしい風情示せば / 謎かけられたらしい若者は / 追いかけてキス求めれば 拒まれはしない。 / 疑いなくこれは彼女の想い人、なぜなら、彼の上着には / どの花も上等な花束が入っている。 / そして羨しく思う連中が ビール飲みつつつぶやいて、 / 隣の男にうなずいて この秘密を明らかにしつつ / 笑いを高めて このつぶやきを一座に聞かせると / 娘は黙って 顔赤らめるものの、否定しはしない。 / こうしてビールと歌と乾杯と楽しいきたりが / 昔の農夫の時代の名残を留めて見せるが / 昔、ミルク粥のご馳走を盛りつけた / 古いブナの鉢は 脇に捨てられ / あの頃はまだ生きていた古めかしい自由 / 主人が 使用人と共に楽しみの席にはべり / 主人の上着もその隣の男たちと同じ赤茶色で / 主人の言葉も作男の言葉と同じく田舎びっていて / 主も 同じ角型のジョッキで農夫とともに飲み / 働く人と同じ合唱に加わった あの自由は / これは全て過去のものだ——そして時から裂き取られた / この祝日の断片も やがてすぐに過去となるかも知れず / 奢り高ぶる《差別》が高貴なものゝ卑賤なものゝ間に / 今よりも大きな隔てを作ってしまう頃には / 《奢り》が風習の上に、風習のか弱い花たちの上に / 朧枯れの白い粉を撒き散らし、花たちは褪せてゆくだろう」。

「六月」はこれで終わる。素朴な男女の描写にも注目！

本稿は下記「森松 2013」の第22章に入れるはずだったものだが、同書「あ
とがき」に記した理由で、約束の日までに脱稿できなかった。予定した原稿か
ら、「森松 1993」との重複をほぼ全て抜きとって本稿とした。本誌への掲載に
深くお礼を申し上げる。

引用・参考文献

- (本稿の底本は *EI*, *EII* と注記した (eds. Eric Robinson & David Powell) *The Early Poems of John Clare*, 1804-1822. 2 vols. Oxford, 1989 と、*PC* と注記した Penguin Classic 版の (ed. Geoffrey Summerfield) *John Clare : Selected Poems, The Middle-Period Poems of John Clare, 1823-1836*. 2 vols. Oxford, 1996 (*MI* & *MII*= *Midsummer Cushion*) と *The Later Poems of John Clare, 1837-1864*. 2 vols. Oxford, 1984.) . 以下の一覧には、これらの版本の 2 重記載は避けた。
- Clare, Johanne. *John Clare and the Bounds of Circumstances*. McGill-Queen's UP, 1987.
- Clare, John. (eds. Erick Robinson & Geoffrey Summerfield) *Selected Poems and Prose of John Clare*. Oxford UP, 1967.
- . (ed. James Reeves. *Selected Poems of John Clare*. Heinemann, 1954 ; 1968.
- . (eds. Erick Robinson & Geoffrey Summerfield) *The Shepherd's Calendar*. Oxford UP, 1973.
- . (ed. Margaret Grainger) *The Natural History Prose of John Clare*, Oxford UP, 1983.
- . (ed. Erick Robinson) *John Clare's Autobiographical Writings*. Oxford UP, 1983.
- . (eds. Erick Robinson & Geoffrey Summerfield) *The Shepherd's Calendar*. Oxford UP, 1964.
- . (ed. Geoffrey Summerfield) *John Clare : Selected Poems*. Penguin Classics, 1990. (=PC)
- . (eds. Dawson et al.) *Political Verse and Prose*. → Dawson.
- Congleton, J. E. *Theories of Pastoral Poetry in England, 1684-1798*. Gainsvill, Florida UP, 1952.
- Cooper, Helen. *Pastoral : Mediaeval into Renaissance*. D. S. Brewer, 1977.

- Dawson, P.M.S., Eric Robinso & David Powell. *John Clare : A Companion for the Poor : Political Verse and Prose*. Carcanet Press, 2000.
- EI → *The Early Poems of John Clare, vol I*, Oxford, 1989.
- EII → *The Early Poems of John Clare, vol II*, Oxford, 1989.
- Marks, Jeannette. *English Pastoral Drama : From the Restoration to "Lyrical Ballads"*. Methuen, 1908.
- 森松健介「自然詩人クレアの美意識」, 『英語青年』第139巻 第4号, 1993(7月号)。
- 『近世イギリス文学と《自然》—シェイクスピアからブレイクまで』中央大学出版部, 2010。
- 『イギリスロマン派と《緑》の詩歌—ゴールドスミスからキーツまで』中央大学出版部, 2013。
- Patterson, Annabel. *Pastoral and Ideology : Virgil to Valery*. California UP, 1987.
- Pope, Alexander. *The Twickenham Edition of the Poems of Alexander Pope*. 11vols. Methuen, 1961. (=TE)
- PC → Clare, John. (ed. Geoffrey Summerfield) *John Clare : Selected Poems*. Penguin Classics, 1990.
- 鈴木蓮一(訳), (ed. R. K. R. Thornton) 『ジョン・クレア詩集』英宝社, 2004。
- TE → Pope.